

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02275

研究課題名(和文)キリスト教文化における神聖空間の形成と図像記憶をめぐる歴史人類学的研究

研究課題名(英文)Historical-Anthropological Study on the Creation of Hierotopy and the Image-Memory in the Christian Culture

研究代表者

水野 千依 (MIZUNO, CHIYORI)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：40330055

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：中世末からルネサンスのキリスト教文化における聖像の機能を二つの事例を中心に歴史人類学的に考察した。

(1) トスカーナ地方における聖母像崇敬において、聖なるモノ(聖遺物や聖像)が、パラテキスト的装置(枠縁、ヴェール、マント、聖遺物容器、タベルナクルム)、聖像譚、聖像儀礼によって、いかに神聖空間(ヒエロトピー)を複合的に形成するかを明らかにした。
 (2) アルプス周辺の文化的周縁地に残存する特異な図像「主日のキリスト」の形成・変容・融合・解体に注目し、罪や贖罪の観念を想起させる記憶術的イメージとしての機能を指摘した。またこの像に複数の形象の記憶が圧縮されている点を他文化圏の関連する像と比較考証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、近代に遡及的に生み出された「芸術」概念をはじめ、美術史学の諸前提を問い直し再検証するとともに、イメージ人類学的、あるいは歴史人類学的手法でイメージを再考するためのケース・スタディであり、方法論という点で学術的意義がある。扱う対象も、一般的な意味での「芸術作品」にとどまらず、キリスト教文化において礼拝対象とされた聖像の地位や機能、文化や時代を超えて図像そのものに積層する記憶の問題、等、従来の伝統的な研究手法では十分に掘り下げられてこなかった問題領域である点で、独創性がある。

研究成果の概要(英文)：I examined two case studies to consider the functions of the sacred images in the late medieval and Renaissance Christian culture from historical-anthropological point of view.

(1) I focused on the veneration of the “Madonna of Impruneta” in Tuscany and analyzed how the sacred objects (relics and images) made the ‘Hierotopy’ through the paratextual equipment (frames, veils, mantles, reliquaries, tabernacles), narratives of sacred images and ritual performances.

(2) I observed the formation, transfiguration, amalgam and disappearance of the strange image “Christ of Sunday” which survived in the cultural peripheries in the Alpine region, and pointed out its function as the memorial image to remember the notion of the sin and redemption. I also considered how the memory of several other figures was compressed in this image, and compared it to the similar images in the other culture: for example, “Dona Sebastiana” in New Mexico, and Minkishi in Congo.

研究分野：西洋美術史

キーワード：西洋美術史 宗教美術史 歴史人類学 神聖空間 図像記憶 イメージ人類学 主日のキリスト 聖像儀礼

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、美術史学の諸概念の再検証とともに、イメージ人類学的、あるいは歴史人類学的手法でイメージを再考する可能性を探るという方法論的関心がある。

1960・70年代から、西欧社会の価値体系や組織形態の相対性が認識されるにつれて、他の人文科学と同様に美術史においても、従来の学問の前提を問い、隣接諸分野との領域横断的な対話を重視する傾向が高まった。いわゆる「ニュー・アート・ヒストリー」と呼ばれる動向である。そこでは、ポスト・モダニズムを背景に素朴な実証主義や歴史主義が反省され、「中立で透明な主体」、「自律的な作品」という「近代」的な認識図式や西欧中心主義の価値観が見直された。新しい研究モデルが人類学や社会学に求められ、社会的・文化的コンテクストにおける作品(=テクスト)のあり方を問う視点が前景化する。さらに古典的な美的ヒエラルキーに基づく研究対象の措定が疑問視され、「芸術」以後とされたモダン・アートを射程に入れるとともに、ポスト・コロニアル理論をふまえ、非西洋圏を含む様々な時代・文化圏のイメージを相対的に捉えることで文化的に非対称なまなざしを是正することが求められた。また、作品を媒介するメディアやテクノロジーの問題にも視線が注がれ、作品よりも、作品記述や解釈といった美術史の言説自体を問い直すメタ美術史的研究も萌した。さらに19世紀末の美術史草創期に立ち戻り、人類学的視座からイメージ研究を志向したA.ヴァールブルクの知的遺産を再評価する動きも起こった。

こうしたなか、西欧的な「芸術」概念を人類に普遍的な「イメージ」という概念へと開き、その価値や機能をグローバルな視点から間文化的に理解しようとする「イメージ人類学」が囁かれ始める。人類全体を包括するより普遍的な地平でイメージ理論を構築する必要性が唱えられたのだ。先駆的研究者の一人、アメリカのD.フリードバーグは、イメージをスタティックな鑑賞対象として捉え様式や意味内容を問うのではなく、その「行為遂行性」や「力」に着目し、像が見る者に及ぼす効果や働きかけと受容者側の反応を社会心理学や神経科学的パラダイムに照らして分析する手法を提唱した。ドイツ語圏では、H.ベルティンクが「イメージ人類学」を書名に掲げ、「芸術作品」ではなく「イメージ」を人類に普遍的な項と措定し、「イメージ・メディウム・身体」という三概念を軸に独自の論を展開した。フランス語圏ではG.ディディ＝ユベルマンが「非知へのまなざし」「アナクロニズムの復権」「歴史の無意識 = 「残存」といった概念を通じて、ヴァールブルクの「名前のない科学」の継承を訴えるイメージ人類学を提唱した。またアナール学派のJ.-C.シュミットやルーマニア出身のV.I.ストイキツァは歴史人類学的立場からイメージ研究に一石を投じている。

一方、人類学においてもイメージ研究が旺盛に進められている。19世紀の進化論の誤謬に対する反省から20世紀に入って文化相対主義を推進してきた人類学は、単一の土地や民族の特殊性や差異を強調する多文化主義を徹底し、人間に関する普遍的問いからは後退しつつあった。だが近年、諸文化を横断する人類の普遍性を問う動きが萌すなかでイメージにも注意が向けられている。さらに、人間の営みに先立つ所与の「自然」(現実の世界)を単一と見なし、人間の生み出す「文化」(世界観)の多様性を描き出すことに立脚した「プルーラリズム(複数主義)」とも呼ばれる近代の分析図式が再考され、人間や主体の実体性を所与のものとしてせず、むしろ人間と非人間的な存在とが取り結ぶ様々な「関係性」によって現実が構築されることに着目する「存在論的転回」が叫ばれている。イギリスの社会人類学者A.ジェルは、人間の行為を媒介する社会的な行為主体(agent)としてイメージや文化的事物を関係論的に捉える理論を提唱した。フランス語圏ではPh.デスコラが「イメージを生む」という人類の普遍的な造形実践に、世界の諸存在を関連づける図式 = 存在論を読む「造形人類学」を展開している。C.セヴェーリは、同一の、またあらゆる文化のなかで、イメージに依拠する思考実践に結びついた複数の存在論的次元の共存を照射し「思考実践の諸形式の一般人類学」を推進している。T.ゴルセンヌは「装飾」のイメージに人間と動物に共通の普遍性を見る可能性を問いかけている。

こうした問題意識を共有しつつ、研究代表者は、「様式概念」が萌し「美的価値」への意識が高まったルネサンス期を対象とし、伝統的な「芸術」作品だけでなく、「芸術」という近代以降に遡及的に再定義された概念に包摂しえないイメージをも視野に入れ、当時の文化における多様な表象や象徴的行為の体系のなかでそれらが担った地位や機能、行為遂行性、作品(無機的なモノ)と受容者(人間)との間に生成する複雑で双方向な関係性を浮彫にすることを試みてきた。2011年に刊行した単著『イメージの地層』(名古屋大学出版会)では、礼拝像の地位と論理、宗教改革や対抗宗教改革(カトリック改革)のなかで崇敬/破壊、生/死の狭間を揺らいだ聖像のあり方、像主の身体部位を型取りしたインデックス的像のもつ呪術的次元、終末論的予言や記憶術と関わるイメージ、さらに幻視や瞑想など「心に描かれるイメージ」などに焦点を当てた研究の成果を公表した。しかしこれらの研究を通じて新たに見出された課題は数多く、作者性、様式、図像、保存・修復など、美術史学の基礎概念そのものを再考する必要性を感じるに至った。そこで、キリスト教文化の表象の根源にある「不可視の神の視覚化」をめぐる問題に焦点を当て、こうした諸概念を歴史人類学的視座から再検討し、成果を2014年に『キリストの顔』(筑摩書房)として公開した。

これら一連の方法論的試みを基盤とし、本研究では、以下の「2. 研究の目的」にあげる二点を具体的対象として、方法論的可能性のさらなる探究を試みた。

2. 研究の目的

本研究は、西洋キリスト教文化における像のあり方をめぐる以下の二つのケース・スタディを

通して、無機物たる像と人間とが紡ぐ存在論的關係を歴史人類学的に考察することを目的とした。

(1) 中世末からルネサンス期のトスカーナ地方(イタリア)における聖母像崇敬のトポグラフィに目を向け、聖なるモノ(聖遺物や聖像)が、パラテキスト的装置(枠縁、ヴェール、マント、聖遺物容器、タベルナクルム) 聖像譚、儀礼的行為によって、いかに神聖空間(ヒエロトピー)を複合的に形成していくかを考察する。

(2) 文化的周縁地、とくにアルプス周辺に残存する特異な図像の形成・変容・融合・解体の現象に注目し、A.ヴァールブルクの「図像記憶」という概念を参照しながら、その論理を探求する。さらに、人類学的にみて類比しうる他文化圏の事例とも比較し、ヴァールブルク、C.セヴェーリなどが試みた、時間・空間の関係性や連続性を超えた次元での図像の生・死・死後性を捉える。

3. 研究の方法

(1) 中世末からルネサンス期にトスカーナ地方で高揚した聖母像崇敬を対象に、無機物のモノにすぎない像がいかに聖性を付与され、人々に特別な力を行使する生ける存在となるのかを分析する。

自然災害やペスト、さらに政治、社会、経済的危機に見舞われた14世紀のフィレンツェでは、従来、都市を守護してきた諸聖人を頼みにするだけでは足りず、新たな守護を聖母に求める機運が高まりをみせた。そのなかで、領土内の各地に根ざしていた聖母像崇敬をフィレンツェが「流用(アプロプリエート)」するという現象が見られた。折しもフィレンツェは領土拡張政策に乗り出した時期で、征服の対象とした土地の力ある聖像崇敬を自らの勢力圏に移植することで文化変容をもたらし、やがて到来するメディチ政権を準備する素地を形成しようとしていたと推測される。こうした状況を背景に、14世紀にコンタド(都市周辺部)のインプルネータからフィレンツェへと流用された聖母像崇敬に注目し、いかに田園の聖母が都市フィレンツェの「守護的象徴」へと地位を高めたのかを、以下の観点から検証するとともに、トスカーナ一帯の聖母像崇敬を地政学的に捉え直す。

本像は、危機的状況のたびに山間部を通過してフィレンツェへと行列によって運ばれるという独特の儀礼を形成したが、それゆえに損傷が激しく当初の画面をほとんど留めないばかりか、18世紀に贋作者の手による想像上の古様で書き直されている。礼拝像にしばしば見られるオリジナルの外観を失った聖像への美術史的アプローチの可能性を再考する。

本像をめぐる形成された聖像譚に注目し、フィレンツェの領土一帯の他の聖像や聖遺物の伝承との比較を通じ、既存の物語トポスを反復しながらも、それらに見られる差異や類似性をコンテキストと対照させながら分析する。聖像譚分析の手法を見定めるために、ロシア・フォルマリズムのV・プロップ、構造主義を代表するC・レヴィ=ストロース、さらにフランスのG・ジュネットらの物語論(ナラトロジー)の手法を批判的に参照する。

聖像を演出するパラテキスト的装置(枠縁、ヴェール、マント、聖遺物容器、タベルナクルム)がいかに像の聖性を喚起し、固有の神聖空間を形成するのかを、とくにロシアの美術史家A・リドフ氏の提唱する「ヒエロトピー」、「空間的イコン」という概念を踏まえて分析する。さらに、ひとたび聖性を認められたヒエロトピーのパラダイムがいかにフィレンツェの領土内に複製反復されていくかという問題についても、「場の模倣」という概念とともに掘り下げる。

田園と都市の間で展開したインプルネータの聖母像の行列、その途上で聖母像が邂逅した他の聖像や聖遺物との関係を調査する。危機的状況においてはインプルネータの聖母像だけでなく他の聖母像も領土内の山間部からフィレンツェに召喚されたことが判明している。今ではフィレンツェと関連づけられることのないそれら聖像間のミッシング・リンクを再構築し、その関係の構造や力学を探る。さらに、トスカーナの事例にとどまらず、聖像を用いた宗教行列の主要な事例として、ビザンティンにおけるコンスタンディノポリスのホディゲトリア・イコン、ローマのラテラーノ宮殿にある救世主像とサンタ・マリア・マッジョーレ聖堂の聖母像の像儀礼、さらに中世を通じて見られる聖像行列などとも比較する。

本聖母像の基層に横たわる古代エトルリア ローマ時代の宗教との関係を掘り下げる。

(2) 従来の美術史学においては主たる研究対象とされてこなかった文化的周縁地のひとつ、アルプス地方の山間部には、都市部にはみられない(あるいは淘汰された)特異な図像が残存している。16世紀に起こった宗教改革や対抗宗教改革(カトリック改革)のなかで、図像は検閲や統制の対象となり破壊や修正を被ってきたが、近年、白塗りされていた壁の下層から抹消された図像が少しずつ再発見されてきている。「正統」な図像と認められずに否定された図像の調査を通じて、聖像検閲の論理を明らかにするとともに、文化的中心(都市部)において構築される伝統とは異なる図像がいかに形成され変容するのか、その特異な現象をA.ヴァールブルクのいう「図像記憶」という概念とともに考察する。

とくに調査対象とするのは、キリストの周りに労働具を描く「主日のキリスト」と呼ばれる図像である。日曜日を聖とする戒律を人々に喚起し、この掟を遵守しない罪ゆえに苦悩するキリストを示す教訓画で、1325年頃からアルプス一帯やイギリスに出現し、16世紀半ば頃まで様々な変容を遂げつつ描かれた。「悲しみの人(imago pietatis)」としてのキリストの周りに受難具を配するより一般的な図像「キリストの受難具(arma Christi)」から派生し、ときに日常の労働場面が風俗的要素を高め、キリストが女性化、ひいては両性具有化したり、ルッカの名高い奇跡

像「ヴォルト・サント」や、弓で射られる聖セバスティアヌス像と混淆したりするなど、混成的で逸脱的な性格が強い。こうした異なる図像の融合・圧縮から形成され、伝統的図像から乖離し、ときにアイデンティティを攪乱するような特異な図像のあり方を、最終的には、ニューメキシコの聖史劇に登場する「ドニャ・セバスティアナ」(聖セバスティアヌス、キリスト、死を表象する女性像の融合した形象)や、自ら一身に釘や矢を受け止めることで他者を治癒するコンゴのヨンベ族の呪術人形「ミンキシ」など、文化圏を超えた類比例や、記憶術的イメージと比較し、能動性/受動性、像にそなわる力や行為遂行性なども視野に入れて考察する可能性を探る。

4. 研究成果

(1) インプルネータの聖母像崇敬を核に、神聖空間の形成と聖像儀礼の問題を考察する第一の課題においては、イタリア、トスカナ地方各地の聖母の奇跡像に関する現地調査と、一次・二次資料の解読を通じて分析を進め、2016年12月に成城大学で開催されたシンポジウムにて成果を発表し、2018年に『「祈ること」と「見ること」: キリスト教の聖像をめぐる文化人類学と美術史の対話』(喜多崎親・川田牧人との共著、三元社)として刊行した。そこでは、上記「3.(1)」においてあげた①～⑤の論点を中心に、各節において論じた。

第一節「聖像の物理的外観と隠蔽」では、インプルネータの聖母像のオリジナルの画面が損傷により判読不可能であったため、18世紀にある贋作家がその図像上に想像上の古様で新たな像を描き直し、現在まで崇敬を維持してきた点に着目し、像の外観や美的価値と礼拝価値の問題を問い直した。聖像は、礼拝を絶やさないために、その外観を変容させることで息をつなぐとともに、礼拝価値を高めるために、しばしば聖遺物の如く隠蔽され不可視の領域に移行された。聖像の隠蔽と開示はその礼拝価値を高め、人々の崇敬を統御すると同時に、原罪を負った人間の目には捉えられない神的存在の超越性とその不可視性/表象不可能性を演出する所作であった。さらに、聖アウグスティヌスに遡る人間の視覚の三様態(身体的(corporeal)、霊的(spiritual)、知性的(intellectual))をふまえ、聖像は現世の人間の目に供されるメディアでしかなく、最終的にはその次元を超えて、死後の至福直観へと至るよう人間は知性的視覚を鍛錬する必要があることを導いた。

第二節「パラテキスト的装飾の壮麗化」では、力をそなえた像を隠す代わりにその複製を増殖させるという現象や、奇跡を祈願したり感謝するために捧げられる奉納像の集積が、目には見えない像の力を顕在化させる現象に加え、隠蔽された聖像の周りに「神聖空間」を形成するべく、聖龕(タベルナクルム)、枠、マント、ヴェールなどのパラテキスト的装置が加えられる現象を指摘した。しかも、インプルネータの聖母像では、そうした神聖空間が、すでに崇敬の確立しているフィレンツェやローマの他の有名な聖母像の空間構造を模倣して形成されており、視覚的に類似する空間構造を付与することで、複数の聖母を緊密に結びつけ、その奇跡力を間視覚的(インターヴィジュアル)に増幅・共振させようとした可能性が浮上した。そしてその構造がひとたび確立されるや、フィレンツェの従属都市の聖堂群にも反復され、ローマに並ぶ都市としてのフィレンツェの威信を視覚化した可能性を論じた。聖なるものは単体で作用したのではなく、他の力ある聖像や聖遺物、さらにそれらを演出するパラテキスト的装置との複合体として機能し、ひとたびその複合体が権威を得るや、その構造を模倣することで、間視覚的に力を補強し合う「ヒエロトピー」が各地に複製・反復されていった様相が浮かび上がった。

第三節「聖像譚」では、聖像の礼拝価値を左右する重要な要素であり、崇敬が確立された経緯を伝える史料でもある聖像譚を分析した。インプルネータの聖母像にまつわる伝承を分析し、そこに、聖遺物や聖像にまつわる伝承に反復されるトポスと、既存の物語モチーフの選択的引用が見られることを指摘した。まず共通する要素としておよそ五つのトポスが挙げられる。第一に、聖なるものは異教徒などの迫害から保護するべく隠された後に再発見される【発見(inventio)】。しかし発見された場で崇敬されることは稀で、概して別の土地へと移動される【移動・奉遷(translatio)】。そして発見直後から様々な奇跡を起こすことで真正性を認められ、最終的に崇敬の場に安置され展覧される。【奇跡(miracula)】、【到着・奉挙(adventus, elevatio)】、【顕示・展覧(ostensio)】が最後の三つのトポスである。インプルネータの聖母は、見事にこの五つのトポスを踏んでいる。さらに、インプルネータの聖像譚に見られるいくつかのモチーフは、フィレンツェの従属都市の複数の聖母像にも確認された。一連の物語要素の類似性にはいかなる意味があるのか。いずれも農村文化固有の特徴を示すとともに、聖像譚が既存の物語要素を利用して形成されていることが浮かび上がる。そして興味深いことに、インプルネータの伝承が権威を得るや、フィレンツェの支配下にある土地にその類型が伝播し反復されていった。類似する物語伝承を備えた聖像同士が、フィレンツェの守護的象徴たるインプルネータの聖母を中心に目には見えないネットワークで結び付けられ、聖なるコスモロジーを形成していたかのごとくである。聖像を演出する空間が、権威ある別の聖像の空間構成を模倣するトポミメーシスによって間視覚的關係性を形成し、神聖性を可視化したように、聖像譚もまた前述の五定型を踏まえつつも、既存の様々な物語からモチーフを抜き出したパスティシュにより織り上げられるテクストだったと言える。さらに、その後の聖像譚の変容を分析することで、インプルネータの聖母像崇敬が、古代エトルリア・ローマの異教時代に遡る泉崇敬という古層の上に隣村ピフォニカの聖母像崇敬が流用・移植され、それがさらに14世紀にフィレンツェへともたらされ、異教のマルス神崇敬に接木されたという複雑な経緯も見えてきた。

第四節「聖像行列による空間的イコンの形成」では、インプルネータの聖母はフィレンツェに

行列によってもたらされてはじめて力を発し、その行列は、途上にある教区聖堂の聖像と数々の聖人の聖遺物と邂逅しながら遂行された点に着目した。この邂逅は、神への執り成しのために聖人の名前を連呼する連禱や、念珠やロザリオを爪繰りながら唱える「天使祝詞」や「主の祈り」のごとく「信心の羅列」とみなすこともできる。もっともここでは、聖母より下位の聖人たちが聖母に崇敬を表するヒエラルキー構造が明確であり、複数の聖なるものが融合することで一時的に神聖なヒエロトピーが形成されている。その様子はさながらミニチュア・パンテオンのごとく、霊験あらたかな聖像を数々の聖遺物が取り囲むタイプの聖遺物容器の構造を現実の三次元空間へと投射し演出したもの、あるいは「空間的イコン」ともいえるだろう。さらに深刻な危機的状況下では、従属都市の他の聖母像もフィレンツェにもたらされ、複数の聖母像が同時に祈願の対象となった。この場合、フィレンツェの権力の象徴たるインブルネータの聖母を頂点とするヒエラルキーに沿って近隣の聖母像や聖遺物が位置づけられ、さらにインブルネータの聖母もローマ教皇の権威によってその価値を承認され、まさしく「多極的でありながら中央集権化されたキリスト教世界」の社会構造を映し出すことが確認された。

以上の考察より、従来、美術史学の諸概念ではとらえ難く、啓蒙主義以降、「民衆の迷信」として看過される傾向にあったこの種の礼拝像の構造を理解する一つの視座を得ることができた。

(2) アルプス周辺の山間部に残存するキリスト教の特異な図像、特に「主日のキリスト」図像の残存と記憶については、事情により、予定していた広範な地域の作品例を網羅的に調査することはできなかった。しかし、主に注目してきた「主日のキリスト」(主日に禁じられた人間の労働や行為によって、周りに配された労働の道具によって傷を負うキリスト)という図像を、ただキリスト教の正統的規範から逸脱する図像と捉える従来の見解に対して、「傷を負う身体表象」あるいは「身体部位を諸概念と連関させた身体表象」が古くから記憶術的に機能してきたより広い文脈と結びつけることで、図像の機能を問い直すことができた。例えば、医術の世界で流行した記憶術的イメージのなかには、「様々な道具で傷つけられる男」を見いだすことができる。身体各部を貫く医療道具が何らかの医学的知識を喚起したとすれば、キリストを責める労働の道具にも罪や贖罪に関わるメッセージを思い起こさせる機能があった可能性がある。また、人間やキリストの身体の各部位を黄道十二宮や諸元素などと対応させて小宇宙と大宇宙の関係を視覚化する中世の図像の伝統をふまえるなら、「主日のキリスト」は、農村の素朴な民衆に向けた単なる教訓的図像ではなく、キリストの身体の一つ一つの傷を「場 locus」とし、そこに記憶すべき罪の「イメージ *imagines agentes*」を結び付けて描くことにより、古来の記憶術的思考を促す力をそなえていた可能性が浮かび上がる。

さらに「主日のキリスト」は、キリスト自身が性を超越し、女性化したり両性具有化して描かれる例が確認されている。加えて、ルッカの名高い奇跡像「ヴォルト・サント」(この像も性を超越し、聖女キュムメルヌスという新たな形象を生み出す)に派生する図像もあり、異教徒の矢に射抜かれる聖セバスティアヌスの身体と視覚的に親縁性を持つ図像も存在する。こうした像のアイデンティティの揺らぎや多重性、複数の図像記憶の融合・圧縮・ズレといった現象を考察する上で、きわめて示唆的と思われた人類学者カルロ・セヴェーリの『キマイラの原理 記憶の人類学』を翻訳し、白水社より2017年に刊行した。本書は、無文字文化における社会的記憶の形成と継承を、言葉とイメージの特殊な関係に見出し、「顕著さと秩序」、「客体的・再帰的パラレリズム」、「キマイラのイメージと主体の重層決定」など、西洋とは異なる独自の記憶技術のあり方を解明したもので、地域研究の枠を超えて記憶とイメージの問題を人間の思考一般の人類学として理論的に掘り下げており、西洋の事象に立ち戻って考察を進める上でもきわめて示唆に富む。特に第四章で、キリスト教の表象について、北米先住民やヒスパニック系移民の事例を扱っている議論は、「主日のキリスト」との関連で示唆深い。文化間の葛藤や衝突を背景に、ヒスパニック系移民のあるキリスト教共同体が演出する聖劇において、キリスト/聖セバスティアヌス/ドニャ・セバスティアナという形象が差異を孕みつつアイデンティティを分有し、性を転換させ、像の能動性/受動性が変容する現象が見られる。像を力動的に捉えたヴァールブルクの遺産を継承しつつ、セヴェーリが展開するこの議論は、文化や時代の直接的関係性を超えて、図像の記憶が息づく稀有な事例として、「主日のキリスト」の可変性を照らし解読する可能性を秘めていると考えられる。

『キマイラの原理』の翻訳刊行に際しては、「訳者解題」において、近年のイメージをめぐる人類学の状況や、「存在論的転回」と称される人類学における新たな潮流についても紹介する機会を得た。また、セヴェーリが近年、同一の文化のなかに、そしてすべての文化において、イメージによる思考実践と結びついた複数の存在論的次元が共存することを指摘し、思考実践の諸形式の一般人類学の構築を目指すなかで、特に「物質に人格(パーソン)を見る」現象に注目して考察を展開している点も、イメージ論において不可避の重要な問題提起となるであろう。

「主日のキリスト」を記憶術的イメージとして捉える考察から派生して、西洋中世に遡る記憶術的イメージと視覚的概念図の問題についても研究は展開し、「叡智の櫃(*arca sapientiae*)

フラ・アンジェリコ作「銀器収納棚」装飾にみる記憶術的概念図と祈念」を共著『ヨーロッパ中世美術論集 祈念像』(竹林舎、2018年)に寄稿した。この問題はさらに、『中世思想原典集成 精選4』(平凡社、2019年)の巻末エッセイ「心になかに 絵を描く 魂の階梯と形象の彼方」のなかで、特にサン=ヴィクトル学派の創始者フーゴーの著作を軸に否定神学的イメージ論を検証しつつ展開させた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 水野千依	4. 巻 40
2. 論文標題 徳の伽藍 - 中世キリスト教における魂の装飾	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美術フォーラム21	6. 最初と最後の頁 34-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水野千依	4. 巻 XLII
2. 論文標題 書評 越宏一編『ヨーロッパ中世美術論集5 中世美術の諸相』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『地中海学研究』	6. 最初と最後の頁 121-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水野千依	4. 巻 3
2. 論文標題 書評 桑木野幸司氏著『叡智の建築家 - 記憶のロクスとしての16, 17世紀の庭園、都市、劇場』	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 都市史学会	6. 最初と最後の頁 133, 141
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水野千依	4. 巻 44-5
2. 論文標題 キリスト像のキマイラ的変容 - イメージの記憶をめぐる歴史人類学的試論	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 282, 305
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計5件

1. 著者名 上智大学中世思想研究所(編訳・監修) 水野千依(巻末エッセイ「心のなかに「絵」を描く - 魂の階段と 形象の彼方」)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 624
3. 書名 中世思想原典集成 精選4 ラテン中世の興隆2	
1. 著者名 川田牧人、水野千依、喜多崎親	4. 発行年 2018年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 144
3. 書名 祈ること と 見ること	
1. 著者名 田邊幹之助監修、水野千依ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 竹林舎	5. 総ページ数 464
3. 書名 ヨーロッパ中世美術論集3 祈念像の美術	
1. 著者名 カルロ・セヴェーリ著、水野千依翻訳	4. 発行年 2017年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 414
3. 書名 『キマイラの原理 記憶の人類学』	

1. 著者名 水野千依、小佐野重利、京谷啓徳	4. 発行年 2016年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 688
3. 書名 西洋美術の歴史 4 ルネサンス1	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----